

建築論私論

熊澤 栄二 (独)国立高等専門学校機構 石川工業高等専門学校 建築学科

0. 建築論への応答

「ここで述べようとしている建築論とは……建築というものをできるだけ全一的に捉えて、その本質を明らかにしようとする理論的な体型的な考察」(p.7)という有名な件から、森田慶一は『建築論』をはじめめる。

以下に論ずるものは、森田が拓いた『建築論』の地平からはじめ、その地平を超えたところから改めて、「建築とは何か」という事態を捉えるための試論であり、また文字通り私論である。それ故、すぐれて「建築論〈的考察〉」というべきものであろう。また地平を超えたところと断ってみても、建築論を定点観測するための観測地点を確保するという意味で森田の建築論から出るのであり、この意味でも積極的に「〈建築論的〉考察」なのである。

ところで森田は建築論を体系づける際に、慎まやかに一言だけではあるが重要な前提を添えている。「建築世界と他の文化世界——たとえば、経済・政治・思想・宗教など——との交渉・関連において、建築を外から見つめる必要があることは言うをまたぬ。このようないわば外からの建築論も成立するであろうが、われわれは、ここではもっぱら内からの建築論にとどまることで満足しよう。」(p.7)

建築論は、建築という概念をめぐる知識一般に向けた考察ではなく、むしろその「内からの建築論」、建築それ自身の知の成立の基盤に向けた考察であったことに注意を払い、またここから〈建築論的〉考察をはじめることにはしたい。森田はこの「内からの建築論」に対応する「外からの建築論」について詳らかにしている訳ではないが、知の構成からも、建築それ自身をめぐる外延的な知の体系を意味しているのであろう。それ故、建築論〈的考察〉は、どこまでもその内包的な知の構造を求める立場に徹して建築を問い・求めるものでなければならぬ。

森田の建築論が建築の内包的な知を求めていたことは、その出発点として、建築の実存在 existence の様態からその分析が開始されるところに、良くその特徴が表れている。森田は建築論をすすめる上で、それぞれの領域内の問題が

探求されたのちには、「それぞれの存在様態は、一つの建築の中では互いに他者ではなく、一者を形成している」(p.7)と述べる。建築論で明らかにされる建築の知が森田の論じるように「一者」を形成しているならば、その知は恰も建築という最も深遠なる類概念を形成する構成論的な議論にならざるを得ない。つまりこの方向の考察は、原理上、無限とも言える建築の概念全体を体系づける知、つまり均衡のとれた静的な理論大系と表現されざるを得なくなる。その知においては、建築とは、一切の種としての概念を取りまとめる焦点の如くどこまでも不可知なるものとして探求されることになる。しかし建築論的考察は、むしろ建築なるものが無限に生成する建築の具体的な概念の産出の場面に立ち会うことを求めるため、「生成の現(原)場」に帰還する考察として論じられることになるだろう。

1. 強さとは

森田は「内からの建築論」を書き起こす際に、具体的な「一般的な建築である住宅」、特に田舎家に注目している。建築を概念として位置づけるならば、むしろその構造形式や様式などに着目し、論ずるのが手堅いはずである。しかし、森田は田舎家を包含する一般概念(や形式)でなく、その田舎家を構成する「木の柱、屋根の瓦、床に敷かれた畳、明かりとりの紙障子などのものもろもろの物体」(p.7)、素材(むしろ質料と言うべきか)に託して建築の在りようを説明する。探求の終局で明らかにされる建築が、たとえ抽象的な概念であっても(抽象的であるならばむしろ)、その出発点は具体的な「まずそれ(引用者:建築)を支えている体」(p.8)、つまり建物でなければならない。

われわれも森田の「内からの建築論」を標榜するため、より具体的な「この田舎家」のごとき建築から検討する必要がある。さて、森田が例として挙げた柱、瓦、畳、紙障子は、目の前の田舎家を説明する種々の特徴であり、他のどれでもない「この田舎家」として述語づけることは原理的に可能であろう。しかし同時に、この全ての述語をもつても「この田舎家」あるいは端的に「これ!」そのものを表すことは不可能である。建物がもつこの眼前性、あるいは存在の確かさは、述語づける言葉を重ねても到達することが不可能であることは、アリストテレスの個物の論をまつまでもない。しかし、この建物の真に在ることの強さ、リアリティを「作品性」と位置づけるならば、それを述語づける限定面の広さは、その作品性の個別性・単独性の強度を表すことになるであろう。

さて、この作品を限定する「もろもろの物体」(p.7)の全体を「物体性」と呼ぶとき、その全体を内に包み限定する層(面)をわれわれは「形態」と言う。形態はそのうちに物体を集め、材料として方向づけるとともに、その全体を組み立

てとして示す。部材(素材)とは、あらかじめ全体の形態の見通しに従って方向づけられ、整形された材料のことを言うのである。即ち全体の形態はどこまでももろもろの材料を限定づける作用、あるいは力のごときものと見なすことができる。また同時に材料の物理的な特性はすぐれて形態においてこそ現れるとも言う。例えばアーチ構造は、それにふさわしい形態へと素材の石を取りまとめ方向づけているが、同時にアーチ構造においてこそ、素材としての石の重厚さと重圧への持続性を視覚的にもたらすとも言う。それ故、形態はもろもろの物を集め架構へと取りまとめる場のごとき働きをもつ。言い換えれば、形態とは「この作品」へと最高度に素材全体を統一し限定する物理的な存在の存在性そのものと言うべきであろう。

一方、形態は架構、組み立て性として具現化するため、そこにおいて力学的・抽象的な力の概念が可視化する。先の田舎家であれば瓦屋根の重み、あるいは力は直ちに垂木、母屋、小屋束に分散され京呂であれ折置きであれ大梁を介して柱へと伝達される。この形態がもつ架構性はたとえ、仮設性を旨としようが、総じて持続的な時におかれている。森田は「建築が物理的に実存在するということは、建築を構成する素材およびそれを組織した構造物が物体として存立している——瞬時的にしる持続的にしろ——という性質を付与されていることを意味する。」(p.10)とし、建築が物体として存立する時間性を瞬間および持続という観点から論じていることは注目したい。建築のさまざまな存在様態には固有な時間性があることを示唆する一文であるが、もっぱら建築の物理性に関する時間性は「持続性」と捉えてまず間違いなかろう。

さて、形態のもろもろの素材を限定し、全体として統一する作用を概説してきたが、形態についてはまだ論じたらないことも多い。しかし、ここでさらに論を進め、この形態そのものを形成する場面に論点を移すことにしたい。

2. 用とは

建築の形態が最終的に実現するものは、素材およびそれを組織した構造物としての物体ではなく、そこに生まれるまさしく「空間」である。逆に、ある空間を実現するために諸形態が素材を限定する、との言い換えも可能であろう。空間はまず何よりも形態に即して物理的にある。建築における空間の物理的な性質は、形態自身の素材を限定する作用が対象化した最初の在り方と捉えることができる。つまり、物理的な性質を有する空間の形式は、どこまでも素材を限定する作用として見られるが、その内容は一つのしつらえ全体として具現化されたものである。この一つの全体が物理性を越えて行くのは、時の移ろいを包含するそのことにある。物理的な可変性である朝夕の環境の変化はもちろんのこと、日常生活において、衣食住の日常の用途、時には宗教的儀式まで

がこの空間の内容として展開される。先に論じた「形態」との明らかな違いは、持続性に根ざした時間性ではなく、日常生活の場面に即して移り行くその「可変性」にある。それ故、相矛盾する場面への変転には、その変化を支える同一性が要求される。「この部屋は居間である。」「この部屋は儀礼の間である。」という変化を受け入れる同一性をわれわれは「場」と呼ぶ。森田も「このように建築は、家庭生活・商取引・工業生産から宗教儀式まで、あらゆる事物 die Sache に場を提供するもの、そのような場そのもの、として現実存在する。」(p.8)と指摘している。

建築が物理的な性状を越え出るのは、空間として日常の生活そのものを内包し、場として空間が限定される場面である。場としての空間の在りようは、M. ハイデガーによる『存在と時間(Sein und Zeit)』(1927)での環世界 Umwelt における指示連関の分析が参考になる。現存在が世界交渉の場面で出会われるものは部屋であり、その中に張り巡らされた指示連関全体のなかから道具そして共に環世界に生きる他者も出会う可能性が開かれる。さらにその部屋、家の全体は常に既に現存在の在り得ること(生きること)にと密やかに限界づけられている(SZ 15-16節)。この指示連関全体は、現存在のその都度の日常の必要性・目的性に即して存在者を開示する様式であり、建築における「機能」もしくは機能を成立させる基盤と理解して良いであろう。それ故、部屋や家の機能の全体は、そのなかに住まう人の生きる可能性全体、ひいては日常の世界に限界づけられているのである。

このような建築の(物理的な在り方を越えた)事物的な存在の様相では、物は機能という見回しのなかから見出される。道具性に即して意味の連関・文脈をたどり、「形態」が把握(解釈)される。特に内部空間に於いては、先行して物理的な存在としての形態が把握されることは、まず稀である。例えば、オープンスタイルのキッチンを語る時、「見せる収納、隠す収納」など日常における事物的な建築の様相がいきいきと示される。日常の家事、家族との喫食、来客との晩餐など多様な状況(場面)が、調理器具やその形の理解よりも先行して語られる。調理場で語られる「シンプルさ」とは、まずは個々の物(道具)に対する形の審美性でなく、「ミニマムライフ」を実現する「基準(あるいは見直し)」を意味している。日常での現存在の在り方(生き方)へと諸形態が先行的に方向づけられているため、それはもろもろの物を限定する作用(形式)と同時に、限定された物の形(形態)という二つの意味の側面をもつ。

このような建築における機能を、志向性の概念を借りて言い換えるならば、ミニマムライフという生活のノエシ的な限定が、機能としての「シンプルなあり方」つまり形式であり、そのノエマ的な限定が「シンプルなデザイン」つまり形態である。機能的な建築とは、生活の場からのノエシ的な限定とノエマ的

限定がその形態において中和された状態というべきである。それ故、「形式」即「機能」として建築のあり方をみるとき、L.H. サリバンにより定式化された“form ever follows function.”に託して表現することも許されるであろう。

3. 美とは

機能を限定する——あるいは西田幾多郎の表現を借りれば「述語づけている」(特に「私の判断的一般者といふもの」(1927)を参照)——限定面としてのミニマムライフは、機能を媒介として形態を限定する作用そのものと見なすことができる。確かに機能は形態においてそれ自身述語づけることはないが、先に示唆したように、具体的な生活の場面の変化においていきいきと述語づけられている。終局的には、全ての機能そのものは「生きること(現存在の在り得ること)」へと方位づけられている。例えば調理場であれば、料理の完成に向けて、あるいはその喫食の場面へと、さらに雰囲気として語られる居心地など、より内面的な情緒へと方位づけられている。機能そのものがノエマ的方向から反転して、それをより深く包むノエシス的な方向へと限定されるとき、即ち日常の生の局面から機能が包摂されるとき、われわれはそこに機能美を認めるのである。

物をその目的連関という日常生活から限定された抽象的な面より捉えるとき、機能は極めて合理的・客観的な場面として現象する。しかし機能そのものが一転して深く日常生活の生そのものから限定を受けるとき、つまり内面的な情緒性を孕む日常の生をその内容として映すとき、機能は合理性を超えて生活の場面そのものを表現する。それ故、生活の場面とは情態性(内面的な情緒性)において開示された諸空間とすべきであろう。先に見てきたミニマムライフは、生活様式——日常の生活の規範性——としてそれ自身の内で機能性を述語づけるノエシスの限定面でありながら、同時に感情により深く包摂される。そこに機能美として認識されるノエマ的限定面の性格が顕われる。簡潔には、空間そのものが様式性をともないつつ美の認識対象に至るのである。機能性を限定するノエシスの中に空間のノエマ的性格は委縮するが、様式は規範性として空間の内に出現する事物的な存在の全てをその内に映す。様式とは、抽象化される以前の生きた空間の形式的な限定面、即ち空間性のことを言う。

空間は様式として最高度にそして全面的に自己限定することで、それ自身を具体的な諸空間として顕にする。従って、空間の「それ自身を〈空間する〉働き」を様式と呼ぶことも許されよう。様式のこの純粋な自己限定の働きは文字通り何も映さない。それ自身を空間全体の規範性として限定する様式は、それ故、そのノエマ的な性格のみが過度に強調されるならば、悪しき意味での形式主義に墮すおそれもある。しかし、本来的な意味で様式は何も映さ「無い」。それは規範性として「斯くあるべき」という日常における必然性や合目的性を超え

たところからの自由な声に従う意志である。様式とはそれ故、個人を超えたところからの「斯くあるべき」と空間する意志、即ち空間性の現れである。

様式といえども、尚も「斯くあるべき」と規範性が映されるならば、さらにその規範性そのものとしてノエシ的に限定するより深い限定面をわれわれは見る。様式をそのノエシ的な方向へ超越するとき、様式をノエシ的に限定し、そのノエマ的方向に形態を限定する一般者は、「斯くあるべき」と空間する意志の根底である。その根底自身が、空間におけるあらゆる事物的存在を方位づける規範性として様式そのものを対象化する。ノエシ的に限定された様式そのものにおいて映されるものは、もろもろの事物的存在の「斯くあるべき」理想の影である。つまり、もろもろの形態(shape)をその内に包む形式(form)の形式(style)、畢竟するに様式としての形式は、われわれの個人的な造形への意志を超えた、造形における意志そのものである。建築を「建築する」という働きの面から見てみると、建築する者つまり建築家の悩める良心をここに認めることができる。様式が建築家をして「斯くあるべき」と呼ぶ声は、その自由な意志の内から顛れるのであり、日常的な社会的な制約からのそれではない。たとえ建築をする者が日常的な制約として様式に従うといえども、一人のデミウルゴス(古代ギリシア語では「職人」「工匠」。特にプラトン以降「造物神」として「斯くあるべき」と、自由な規範性を意志するのであり、慣習としての規範性はまさしく自由な造形の意志への抑圧と言わねばならない。建築をする者が、建築をすることの働きから自由に「斯くあるべき」と意志するなら、その者はすぐれて建築家と呼ばれるべきである。それ故、建築における(技術者としての)倫理の問題は、本来的にはこの根底から問わねばならない。

さて、様式におけるノエシ的な働きに即して見てきたが、様式には様式美としてなおもノエマ的に映される。それ自身規範性の源泉として一切の事物的な存在を映す一方で、さらにその内奥に美としてそれ自身を映すものであるという矛盾——映すもの即映されるものである矛盾——がある。建築する者その人の個人を超えたところから、そして、その内面的なより一層の主観的な立場から、様式の規範性そのものを内に包むものをわれわれは見る。様式を美として包むものは、もはや個人ではなく、建築をする者としての立場をそのノエシ的な限定の方向で超えたところからの一般者でなければならない。その一般者は、様式における形式を斯くあるべき「真なるもの」としてノエマ的に限定しつつ、「様式的美」として真なるものをその内に包む、即ちノエシ的に自己限定する働きそのものである。

この一般者を超-個人のごとき形而上学的な人格と理解することも強ち無理もない。しかし、形而上学的な人格と捉えるならば、働きそのものであるこの一般者はノエマ的に限定されたものと言わねばならない。それは、その内に建

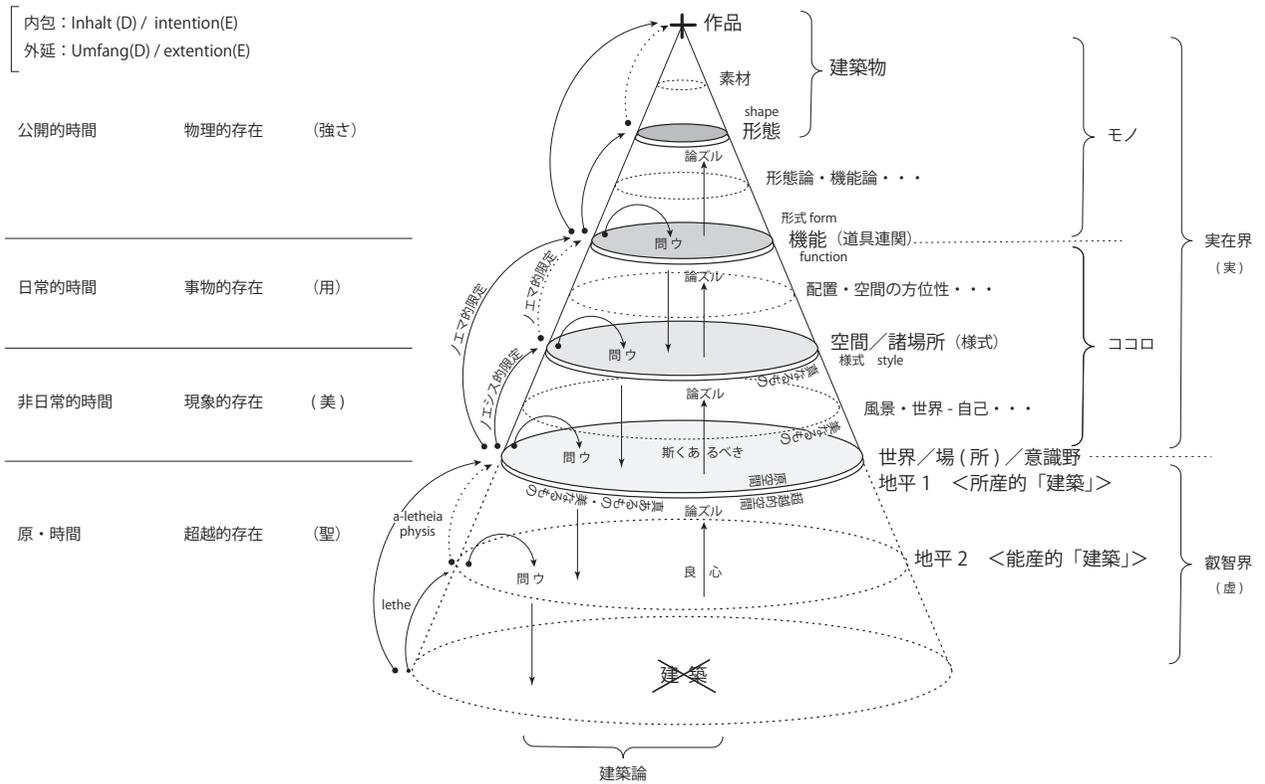
築する者の建築することそれ自身を限定するもの(者)であり、むしろ全ての物理的存在をその内に包むという観点からも、「原空間」とでも呼ぶのが相応しい。原空間はその内に具体的な目の前の空間として己自身を現すのであり、形而上学的な超越者ではない。この意味でわれわれは原空間を「世界」と呼んでいる。世界は物理的に存在するものは勿論、その中において事物的に存在するもの、現象的に存在するものが現れる基盤であり、建築する者もその渦中に居ることを免れ得ない。また、世界は個人の諸可能性の源泉であるので、世界を超えて建築する者は誰もいない。

4. 聖とは

世界はそのなか(内)に生きるものにとって余りにも近く、またそれを認識するものにとって余りにも遠い。世界を表象することは不可能ではあるが、「地平」として象徴することは可能である。地平は一切を取り囲む限界であるが、領域ではない。その内に一切を限定づけながら(産出しながら)それ自身は後退し、あらゆる対象化に対する働きを断念させる。世界は自らの自由な活動において自己限定しつつ(一切を産出しつつ)、自らの内に隠れる彼の働きである。ハイデガーは古代ギリシアにおける自然 *physis* を真理の非・伏蔵性 *a-letheia* から解き明かしたことは周知の通りであるが、建築することはこの自然そのものに憧れる。しかし同時に建築することは自然が世界としてそれ自身を自己限定する一つの経路なのである。

J. ユクスキュルの環世界 *Umwelt* 論において、動物はその固有の環世界に鍵をかけ閉じこもると論じた(*Theoretische Biologie* (1928) 特に「機能環 *Funktionskreis*」を参照)が、一方で建築における世界には、世界の開示に関する独自の諸形式がある。動物の環世界と人間のそれとはなるほど同質であるが、人間の環世界には「建築する」という世界の開示に関する固有の様式を認めることができる。況や自然はそれ自身で建築することは無いが、人間は自然の根本的な開示を映し/写し(憧憬し)、建築することにおいて世界を開く。すなわち、先に縷々論じてきた諸価値を基礎づける原空間を「その内」に産出せしめる。「超越の世界」として世界そのものが自己限定する、つまり建築することは、非在の世界として開示する可能性すら本質的に保有しているのである。

世界は形而上学的に存在し「無い」が、建築することにおいて形而上学的な世界を要求する。即ち、仮象の世界は実象の世界をその内に包むのである。そのとき、実象の世界は仮象の世界のアンチポデスとして振舞う。仮象の世界の非時間性は永遠性を獲得し、実象の世界の持続的時間性は仮初めの時間性へと移(映)される。この反転の可能性をわれわれは「聖」と言う。聖なるもの出現



において、強ち神々の神性の現れであることを否定するものではないが、それは世界の自己限定におけるノエマ的限定面のできごとであり、むしろ「虚実の反転」にこそ真実がある。祭礼の場において持続的な生を生きる人は、奉斎者として永遠の生に預かる神々として転生し、持続的な時間性にある神の社あるいは神殿は永遠性の時に映された建築のアイデアとして現象する。それ故、永遠性という時間性の中では、一切のものは永遠なるものの自己限定つまり表現として顕れる。そこにわれわれは審美的な建築の世界を認める。森田はこの超越的存在と現象的存在との関係を次のように論じている。

文明社会の宗教建築にあつては、それは美しい建築という芸術的現象と結びついて発現する。すなわち現象的存在を通じて超越的存在が意識される、あるいは美しい空間が聖なる空間と重なり合うところで超越性が意識されるのがふつうである。単に重なりあうだけでない、超越的な空間が現象的な空間からいわば放射するのである。ちょうど仏像においてその超越性が後光のかたちで顕示されるように、建築においてその超越的空間は現象的空間の量をかたちづくってそこから放射していると言える。(p.70)

この超越性の反転において、真なる建築、美なる建築のあり方の矛盾が矛盾のままに建築の表現となる。そのとき建築はそれ自身のアンチポデスなのである。